

奈良・平城宮跡

（へいじょうきゆう）

- 1 所在地 一 奈良市二条大路南三丁目、二 同佐紀町
 2 調査期間 一 第一三〇次調査 一九八一年（昭56）六月～
 七月、二 第二六一・二次調査 一九九五年（平7）
 一〇月～一九九六年一月

3 発掘機関 奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部

4 調査担当者 一 代表 岡田英男、二 代表 町田 章

5 遺跡の種類 宮殿・官衙跡

6 遺跡の年代 奈良時代

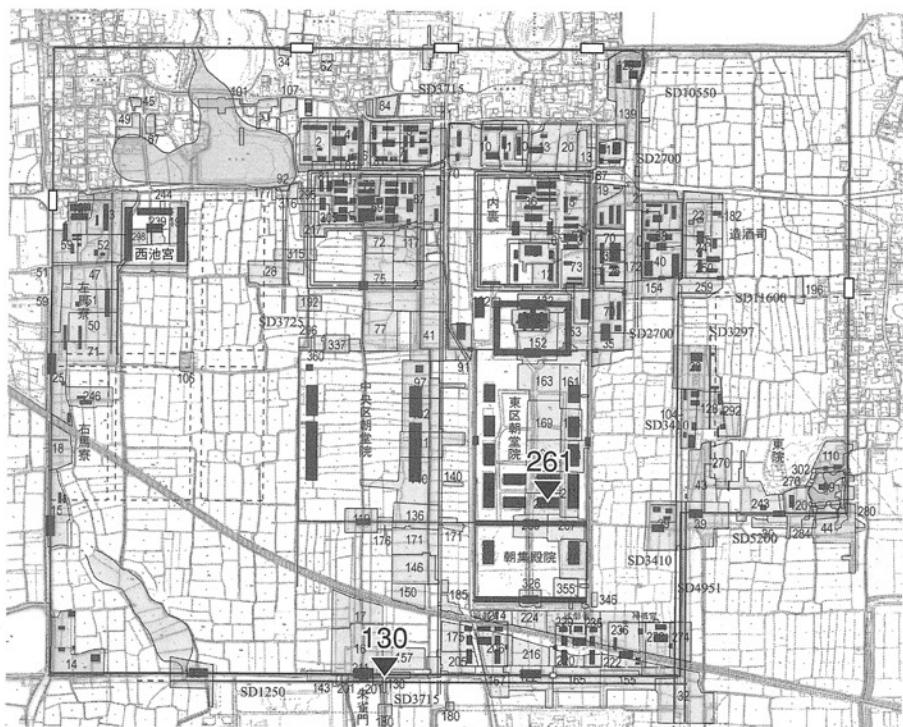
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

以下の二件は、本誌に未掲載であつたことが判明したため、ここに報告する。

一 第一三〇次調査

本調査は、朱雀門東側の南面大垣復原整備工事に伴う事前調査として実施されたものである。調査区は、大垣部分を調査した北調査区と、奈良時代の溝二条を検出した南調査区からなり、調査面積は、あわせて五六〇m²である。木簡は南調査区から出土した。

東西溝SD一二五〇は、幅三・五m深さ〇・二～〇・六mを測り、二条大路北側溝にある。南北溝SD九九二〇は朱雀大路東側溝に



相当し、幅三・五m深三〇・四mを測り、二条大路北側溝SD一二五〇より発し、一条大路を横断して南流する。木簡二点は、SD九九二〇とSD一二五〇交点部分の最下層から、人形二点、曲物一点などとともに出土した。

二 第二六一次調査

本調査は、東区朝堂院東第六堂の調査である。東第一堂から第五堂までの調査により、東区朝堂院の朝堂は、奈良時代前半の掘立柱建物（下層建物）から、奈良時代後半に礎石建物（上層建物）に建て替えられたことが明らかにされている。

調査では、上層・下層の東第六堂（SB一六八五〇・SB一六八〇〇）を検出したほか、堂の南側で、礎敷SX一六八〇五を検出した。下層東第六堂SB一六八〇〇は、桁行二間梁行二間の身舎の南北に廂が付く東西棟掘立柱建物である。身舎部分の柱穴が、基盤面に直接掘形を掘り、柱を建てた後に整地を施しているのに対し、廂の柱穴は整地土及び礎敷SX一六八〇五の面から掘り込んでいること、身舎部分にのみ基壇をもつこと、雨落溝の変遷などの知見により、朝堂の廂は後に増設されたものであることが判明している。

木簡一点は、下層東第六堂SB一六八〇〇の南側柱掘形から出土した。共伴する瓦や土器から、下層朝堂の建設が平城遷都時まで遡ることが明確になつており、木簡も遷都当初の時期のものとみられる。

8 木簡の釈文・内容

一 第二三〇次調査

(1) □□
・ □□
・ □□

(2) □□
・ □□
・ □□

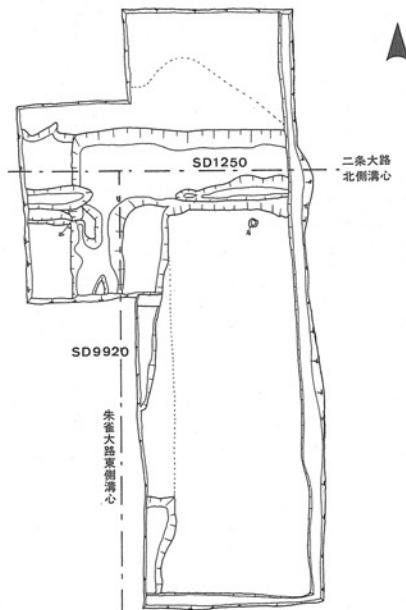
(69)×(4)×3 081

〔職カ〕
人□□□
□平□人□□

□□□
・ □□
・ □□

(139)×(22)×2 081

(1)は上端折れ、下端削り、左右両辺割れ。表面一文字目は「申」と読めるが、偏の有無は不詳。(2)は上端折れ、下端と右辺は削り、



第130次調査南区遺構図

左辺割れ。裏面は偏の残画のみ残り、二文字目は人偏であろう。

二 第二六一次調査

(1)



125×102×13 065

上下両端は切断。左右両辺も切断と判断したが、自然の割れの可能性もある。また、加工と墨書の前後関係は不詳。

9 関係文献

奈良国立文化財研究所『昭和五六年度平城宮跡発掘調査部発掘調

査概報』(一九八一年)

同『一九九五年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』(一九九六年)

奈良国立文化財研究所『平城宮跡発掘調査概報』(一九九六年)

1 所在地	奈良市二条大路南一丁目
2 調査期間	第一九〇次調査 一九八八年(昭63)五月～一月
3 発掘機関	奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部
4 調査担当者	代表 町田 章
5 遺跡の種類	都城跡
6 遺跡の年代	奈良時代
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要	一九八六年から八九年にかけて実施したデパート建設に伴う発掘調査では、総計一一万点にも及ぶ木簡が出土した。その大半は、左京三条二坊八坪東南隅の南北溝状土坑SD四七五〇の長屋王家木簡約三五〇〇〇点と、八坪北側の二条大路上の濠状遺構SD五一〇・五三〇〇・五三一〇の二条大路木簡計約七四〇〇〇点が占めるが、他にも多数の遺構から木簡が出土し



(奈良)

数の遺構から木簡が出土し

奈良・平城京跡左京三条二坊一坪